【翻　訳】

《トンド・ドーニ》とその額縁

カルロ・デル・ブラーヴォ
甲斐教行　訳・註解

《トンド・ドーニ》（図1）の聖家族の背景で、一人の若者が仲間の美しい肉体を完全に露出させている（図2）。私はこの動作を、プラトンの『ゴルギアス』を参照して[1]、本質〔肉体〕を観想するために外観〔衣服〕を取り除く霊的行為と解釈した[2][一]。外観を超えた本質とは、本作のような《聖家族と幼児聖ヨハネ》の場合、プラトン風に解して、先駆者〔洗礼者ヨハネ〕の生涯に年少の――すなわち《饗宴》によればより多く愛される側に相当する――原罪の解放者〔イエス〕が出現することを指す[3][一]。

この種の愛〔より優れた年少者に寄せるプラトン風の愛〕は苦痛を必要とせず、それ自体で〔原罪からの〕贖いをもたらす。実際、イエスの苦痛は預言者と巫女によって予見され、他とは無関係に天に記されていたのである。額縁の円形の区画（クリペウス）から頭をのぞかせる三人の預言者と二人の巫女は、ラクタンティウス〔二四〇年頃―三二〇年頃　初期キリスト教著述家〕の『神聖教理』（*Divinae institutiones*）が伝える順に、イザヤ、ダヴィデ、エレミヤ、一人の巫女、別の巫女と続き[4]、それぞれ、鞭、平手打ち、唾、嘲笑、苦味、酢、荊の冠、木について語っている[二]。いったい、苦痛をも甘受する愛とはどのような人間のものだろうか。なるほどこの種の人間は、同じ額縁の木彫装飾の中で、胸を開いて己の血で子を養う二羽のペリカン（図3）によって表されている。だがそこには、驢馬と雄山羊の性質をもつ、混成体の――すなわち完全に自然界に属する――生物（図4、5）も存在する。これらは薔薇の周囲にいることから、愛の快楽を意味している[5]。こうした生物の常である、快の追求と苦痛からの逃避は、ここでは滑稽なものとして表されている。つまり食欲をそそる果実の頂点にある頭部が、四方に伸びる己の葉と角とを四頭の竜に噛みつかれ、叫び声をあげているのだ（図6）。このような木彫装飾は、ディオゲネス・ラエルティオスが伝えるアンニケリスのキレネ思想――人が生来、快を追求し苦痛を逃れようとするのは事実だが、友のために自己犠牲をなすのもまた同じ人間である、という思想――へとわれわれを導く[6]。

キレネ思想のプラトン主義による超克は《トンド・ドーニ》の中にそのまま見てとれるが、これはまさしくミケランジェロの思想――ミケランジェロがまだ若い頃から抱いていた思想である[7]。実際、青年期の作品である《ケンタウルス族の争い》（図7）では、女たちは動物的な愛から引き離されまいとし、若者は動物的な愛から己が隔てられていることに絶望する[四]（図8）。また《階段の聖母》（図9、10）では、子供たちがその無垢な年齢にも関わらず――つまりキレネ風にいえば生来の性質により――味覚、触覚、視覚の快にとらえられている[8][五]。だがつねに高みをめざす炎を支える、あのきわめて美しい《燭台をもつ天使》（図11）では、もはやキレネ思想ではなくプラトニズムが支配している。プラトニズムはミケランジェロの生涯を通じて継続し、《審判図》ではイエス（図12）がすさまじい剣幕で、苦痛の恩恵に対し愛の恩恵を擁護するだろう[9]。また荊の冠を運ぶグループに属する天使たち（図13）は、苦痛の原因が人知を絶する神の意志にあると教示することだろう[10]。

Carlo Del Bravo, *Il Tondo Doni e la sua cornice* (2005), in Idem, *Intese sull'arte*, Firenze, Le Lettere, 2008, pp.115-117.

原註

（1）プラトン『ゴルギアス』四六五b。

（2）C. Del Bravo, *Intorno al «Giudizio»*, “Artista”, 2000, pp.36-37 (ripr. in *Intese sull’arte*, p.213).〔拙訳「《審判図》をめぐって」、『五浦論叢』一五号、二〇〇八年、一三四―一三五頁〕

（3）プラトン『饗宴』一八〇a；C. Del Bravo, *Magnificat*, “Artista”, 2000, p.144.

（4）Lattanzio, *Divinae institutiones*, 4, 18 (*Patrologia Latina*, 6, col.505-508).

（5）S. Battaglia, *Grande dizionario della lingua italiana*, Torino 1961-2002: voce *Rosa*, accez.2; J. Toscan, *Le carnaval du langage* (1978), Lille 1981, pp.230 (citaz.181), 503 (citaz.797, 798).

（6）ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』二巻八章九七節。

（7）C. Del Bravo, *La bellezza nei «Duchi» di Michelangelo*, “Artista”, 2002, pp.172-174 (ripr. in *Intese sull’arte*, pp.201-202).〔拙訳「〝ケランジェロの《二人の公爵》」、『五浦論叢』一九号、二〇一二年、一五五―一五六頁〕

（8）ディオゲネス・ラエルティオス、前掲書、二巻八章八八節。

（9）C. Del Bravo, *Intorno al «Giudizio»* cit., p.41 (ripr. in *Intese sull’arte*, pp.216-217).〔前掲「《審判図》をめぐって」、一三九頁〕

（10）*Ivi*, p.39 (ripr. in *Intese sull’arte*, p.214).〔前掲「《審判図》をめぐって」、一三六頁〕

訳註

（一）デル・ブラーヴォの先行論文では、《審判図》において男も女も誰もが筋骨隆々とした裸体で表される理由が説明される。真の美が体育によって鍛えられた肉体の中に表れ、衣服はそれをないがしろにするものであるというプラトンの『ゴルギアス』の一節を踏まえ、鍛えられた肉体がプラトニズム的な「本質」を表すものとされる。「さて、衣服が外観を表すとすれば、裸体とたくましさは本質を表すことになろう。それらは寓意的読解を通して、『字義（lettera）』を超えた『意味（senso）』へとみちびくものである。すでに《トンド・ドーニ》においても、たくましい仲間のヴェールをとりさる裸体の少年が、外観を超えて本質にいたれといざない、《聖家族と先駆者（ヨハネ）》という『字義』を超えて、『待望（イエス・キリスト）されし者』に寄せる愛という『意味』へといざなっている」（C. Del Bravo, *Intorno al «Giudizio»*, “Artista”, 2000, pp.36-37 [ripr. in *Intese sull’arte*, p.213]）。〔前掲「《審判図》をめぐって」一三四―一三五頁〕

（二）この解釈は、アンドレア及びヤコポ・サンソヴィーノ、レオナルド、ボッティチェッリ、ミケランジェロを論じたデル・ブラーヴォの先行論文に既出。C. Del Bravo, *Andrea Sansovino e Jacopo*, “Artista”, 1998, p.156 ss. (ripr. in *Intese sull’arte*, p.107 ss.); Idem, *Umanità di Leonardo*, *ivi*, 1999, p.102 ss. (c.s., p.84 ss.); Idem, *Magnificat*, *ivi*, 2000, pp.141, 144 (c.s., pp.19, 21-22); Idem, *Intorno al «Giudizio»*, *ivi*, 2000, p.37 (c.s., p.213).〔前掲「《審判図》をめぐって」、一三五頁〕

（三）本文および原註4に示された典拠（ラクタンティウス『神聖教理』四巻一八章）の該当箇所を抄訳する。

「しかしこれらがそのまま実現することは、預言者たちの言葉と巫女たちの神託によって予示されている。『イザヤ書』（五〇章）にはこう記されているのが見られる。『私は頑なにならず、背くこともなかった。私の背を鞭打たれるにまかせ、私の頬を平手打ちされるにまかせ、おぞましい唾を避けるために顔を隠さなかった』〔「イザヤ書」五〇章五―六節〕。同様に、ダヴィデも『詩篇』三四番で〔こう述べた〕。『彼らはともに集まって私を鞭打ち、私を知らないと言った。私を否定し、悔いることがなかった。私を攻撃し、嘲笑をもってあざけった。また私に向かって歯をかみならした』〔ヘブライ語「詩篇」三五番一五―一六節、ウルガータ訳では三四番一五―一六節〕。（中略）

真実の食物と飲み物について、（中略）ダヴィデは『詩篇』六八番でこう述べた。『彼らは私の食物に苦みを入れ、私が渇いたとき私の飲み物に酢を入れた』〔ヘブライ語「詩篇」六九番二一節、ウルガータ訳では六八番二二節〕。また巫女も次のような未来を説いた。『彼らは餓えを満たすため苦味を与え、渇きを癒すため酢を与えた。彼らはこれらの快適でない食事を示すであろう』。また別の巫女はユダヤの地に次の言葉で呼びかける。『お前は同じ罪深い考えを抱きながら、お前の神が死すべき者らの思いと戯れていることに気づかなかった。だがお前は荊の冠をのせ、おぞましい苦味を与えた』。（中略）『エレミヤ書』（一一章）。「（中略）彼らは言う、『さあ、木をその実（パン）に投げつけ、地上から彼の命を絶ち、彼の名を人に忘れさせよう』〔「エレミヤ書」一一章一九―二〇節〕。しかして木とは十字架を意味し、パンとは彼の身体を意味する。なぜならそれこそが、彼がまとっていた肉と彼が架けられた十字架とを信ずるすべての者の食物であり命であるからである」。

なおこの抄訳における旧約聖書の引用は、ウルガータ訳成立以前に書かれたラクタンティウスの本文に基づいて訳した。

（四）「《ケンタウルス族》においては、ケンタウルス族の一人に矢が放たれるのを見まいとする上方の女や、ケンタウルス族の方に叫びながら走っていく女、とりわけ自分を掠おうとする男に抵抗する女が、動物的な愛から女を引き離すのは男であることを示している。女だけでなく若者にも同じことが言える。実際画面左下で、ひとりの若者が同じ左側にいる女や、ケンタウルスの上に倒れかかる女と同種の苦痛を感じており、まるで父や兄が彼を恋人から引き離しているかのようだ」（C. Del Bravo, *La bellezza* cit., p.172 [ripr. in *Intese sull'arte*, pp.201-202]）〔前掲「ミケランジェロの《二人の公爵》、一五五頁〕。

（五）「乳に満ち足りた幼子は味覚の快を示す。早くも胸の膨らみはじめた少女が幼い少年に寄せる愛情表現は触覚の快を示す。最後に、階段の中程で高い寝台の覆いをもちあげてその下で眠る幼児――その頭部が右側に見える――の裸を見ようとする少年は、視覚の快を示す」（C. Del Bravo, *La bellezza* cit., p.172 [ripr. in *Intese sull'arte*, p.202]）〔前掲「ミケランジェロの《二人の公爵》、一五五頁〕。

訳者後記

デル・ブラーヴォのミケランジェロ研究は、本稿と、本号に同時掲載する《ロンダニーニのピエタ》論によりひとまず完結し、これまで取り上げられてこなかった初期と最晩年の二作が論じられたことになる。当然その内容は既出論文、とりわけ前号に掲載した「ミケランジェロの《二人の公爵》」と深い関わりをもつので、読者の参照を乞う。

これまで取り上げられてこなかった、と記したが、実は《トンド・ドーニ》の絵画部分については「《審判図》をめぐって」（本誌第一五号掲載）ですでに論じられた。今回取り上げられるのは、ミケランジェロの素描に基づくその「額縁」であり、従来本格的な考察の対象となることが少なかった。デル・ブラーヴォはここで額縁に付された人物の頭部を、かつてシスティーナ天井画解釈に用いたラクタンティウスの『神聖教理』に基づいて主題特定する。またこれらの人物から「苦痛」の預言や、「ペリカン」モチーフに見られる「犠牲」の表象、さらには自然界の怪物のモチーフや薔薇のモチーフが担う「快」と「苦痛」の寓意を導きだし、「人が生来、快を追求し苦痛を逃れようとするのは事実だが、友のために自己犠牲をなすのもまた人間である」というキレネ思想の表明として解釈する。

キレネ思想との関連性およびプラトニズムによるその超克は、「ミケランジェロの《二人の公爵》」の冒頭でもすでに論じられている。本稿は「額縁」装飾をもその文脈に位置づけるものである。

今回の訳出にあたっても、原典に含まれない図版を若干追加した。

〔かい　のりゆき／所員・本学教育学部教授〕